



令和2年度発掘調査

埋文

さかど年報



西浦遺跡全景写真

坂戸市教育委員会

序 調査概要

坂戸市は市域の大部分を平坦な台地（坂戸台地・毛呂台地）が占めており、台地の縁辺部には越辺川や高麗川などの中小河川と広大な沖積平野が広がっています。安定した台地と豊かな水源、肥沃な沖積平野といった恵まれたこの土地では、いにしえから人々の豊かな生活が営まれてきました。その活動の痕跡として、市内には旧石器時代（約15,000年前）から中近世に至るまで、数多くの遺跡が存在しています。現在登録されている市内の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の数は152か所にも及び、毎年多くの発掘調査が行われています。

調査の大半は、開発によって失われていく遺跡の記録作成を目的としたもので、住宅建設や公共事業などに伴い、令和2年度には17件の発掘調査が市内各地で実施されました。

市内に残る貴重な遺跡を保存し、未来へと受け継ぐことが、現代に生きる我々の大切な使命です。

おもなできごと

旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代 <small>あすか</small>	奈良時代	平安時代	鎌倉時代
約3万5千年前	約1万5千年前	約2,300年前	約1,750年前	約1,450年前	約1,300年前	約1,200年前	約800年前
大陸から日本列島へ人々が渡ってくる	市内最古の土器（縄文時代早期）土器誕生 市内で石器が出土（後期旧石器時代）	大家地区で多彩な耳飾りが出土	青銅器（銅鐸）などが使用される 稲作伝来・鉄器などが使用される	市内で古墳がたくさん造られる 国内で須恵器の生産が始まる 前方後円墳の出現	平城京遷都（710年） 秩父で和銅が産出 和同開珎鑄造 若葉駅周辺に大規模な集落が出現する	平安京遷都（794年）	鎌倉幕府成立 壇ノ浦の戦いで平家滅亡（1185年） 入西地区や勝呂地区の武士が活躍する 武蔵武士が活躍 関東で平将門の乱が発生（935年）

用語解説

【竪穴建物(たてあなたてもの)】

半地下式構造の建物、居住だけではなく工房や倉庫等、様々な用途に使用された。

【カマド】

竪穴建物内に敷設された加熱施設。調理や暖房として使用された。

【貯蔵穴(ちょぞうけつ)】

竪穴建物内の施設の一つ。床下収納として使用された。

【土師器(はじき)】

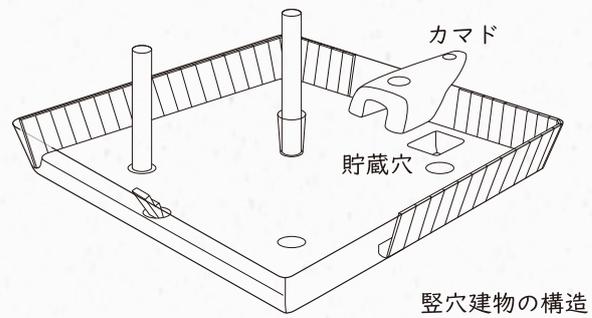
古墳時代以降に作られた素焼きの焼き物。焼き上がりは赤褐色や黄橙色になる。

【須恵器(すえき)】

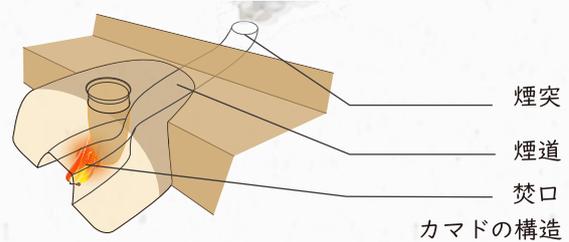
古墳時代に朝鮮半島から伝来した硬質の焼き物。ロクロで成形され、登り窯を用いて焼成する。焼き上がりは青灰色や灰色となる。

【ベンガラ】

酸化した鉄を主成分とする赤色顔料。土器の彩色や布の染色に使用される。

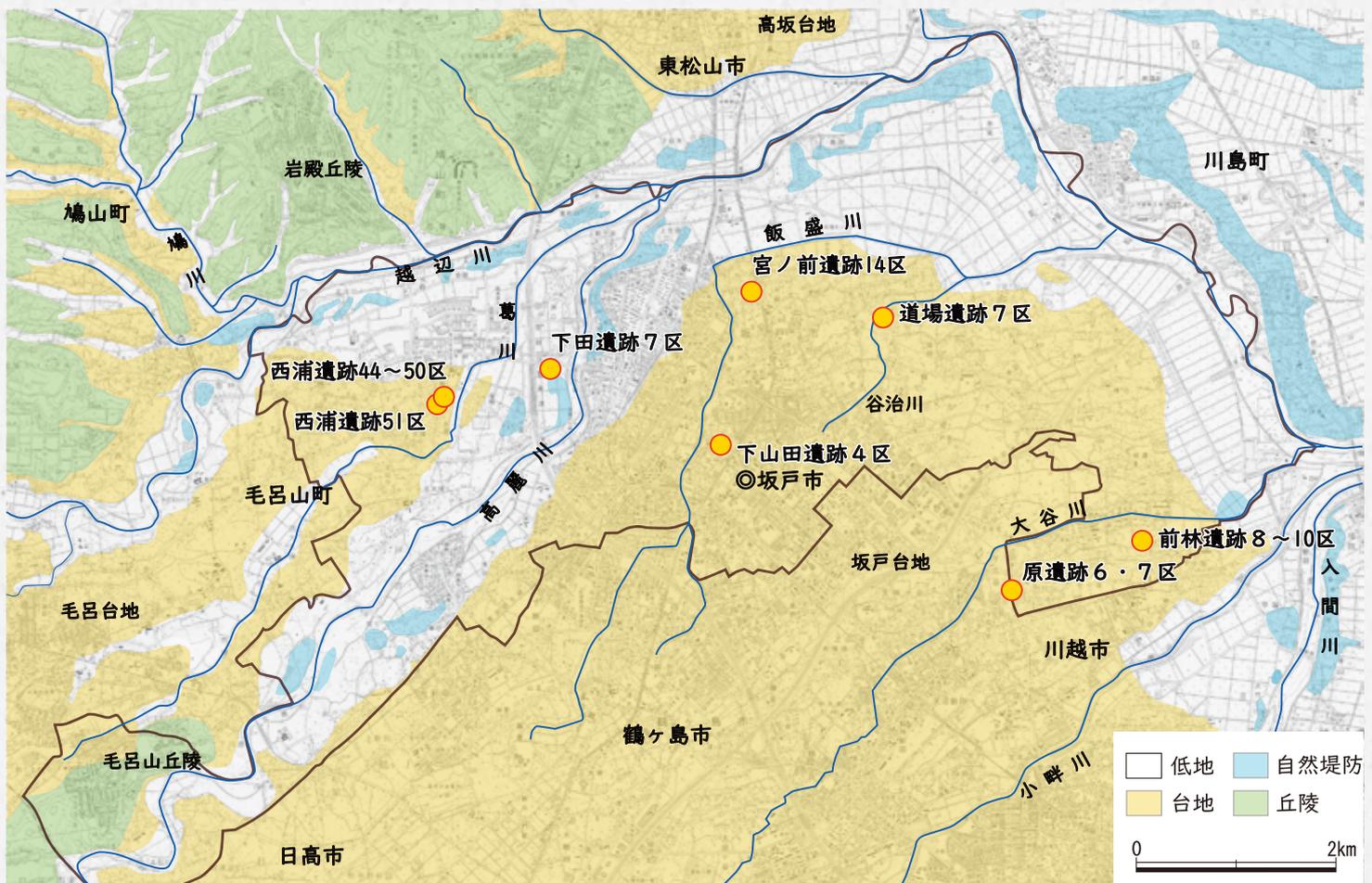


竪穴建物の構造



カマドの構造

令和2年度発掘調査地点



原遺跡6・7区 (坂戸市大字中小坂字原)

基本情報

調査理由：個人住宅建設

調査期間：令和2年3月9日～5月23日（6区）

令和2年7月20日～9月1日（7区）

調査面積：433 m²

検出遺構：竪穴建物8棟（平安時代）、溝2条（平安時代・古代以降）、土坑1基（古代以降）

原遺跡は坂戸市東端部に位置し、遺跡範囲は川越市との行政界に接しています。川越市側には古海道東遺跡ふるかいどうひがしが広がっており、両遺跡では平安時代の集落跡や古代にさかのぼる道路跡などが発見されています。

今回発見された竪穴建物は8棟であり、いずれも平安時代（9世紀後半）に位置づけられます。調査区東側では竪穴建物3棟が重複しており、最も新しい4号竪穴建物からは、多量の焼土や炭化木材とともに多数の遺物が発見されました。このような状況から、4号竪穴建物は火災等によって焼失した建物と推定されます。

また調査区西側で検出された1号溝は、幅約2.7m、深さ約1mを測り、断面形が逆台形をした大規模な溝です。溝はほぼ南北方向に直線的に走行しており、区画溝として機能していた可能性が想定されます。出土遺物は9世紀後半のものが主体であり、出土状況等から溝の開削時期も古代にさかのぼるとみられます。



竪穴建物群

3棟の竪穴建物が重なり合って発見された。



8号竪穴建物

調査区内で唯一全体が分かる建物



1号溝全景（右）と土層堆積状況（左）

大規模な溝が直線上に延びている。



4号竖穴建物出土遺物

4号竖穴建物は焼失建物であり、炭化木材（右上）と共に多数の遺物が良好な状態で出土した。

須恵器高台付坏の底部を打ち欠き、墨のパレットに転用している。



4号竖穴建物出土墨書土器

須恵器坏を逆位にした状態で体部に1文字が書かれている。

侏



うるし
漆状有機物付着須恵器

須恵器坏の破片に漆状の付着物が付いた状態で発見された。



7号竖穴建物出土鉄製品

7号竖穴建物の床面から全長約 20 cmのどうす刀子（小刀）が出土した。

調査原因：個人住宅建設

調査期間：令和2年1月22日～8月6日

調査面積：645㎡

検出遺構：竪穴建物17棟（縄文時代中期中葉、弥生時代終末期～古墳時代初頭、奈良・平安時代）
ピット27基、土坑14基、井戸1基

西浦遺跡は、坂戸市西部の毛呂台地東端部に位置する遺跡です。

今回の発掘調査で発見された遺構はおおむね、縄文時代中期中葉、弥生時代終末期から古墳時代初頭、奈良・平安時代の3時期に分けることができます。

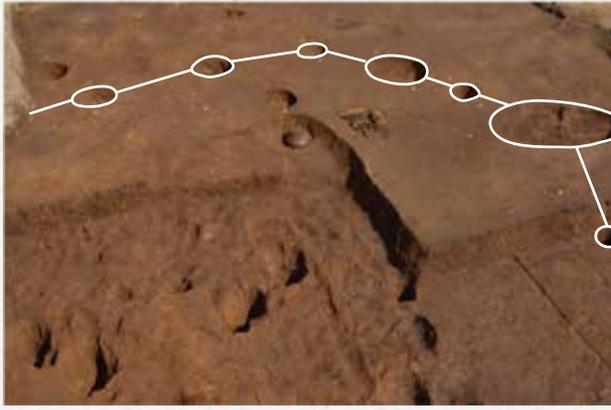
なかでも、弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落は、遺跡内初の発見例となり貴重な調査成果と言えます。

西浦遺跡の東方約500mの低地帯には、当該期の大規模な集落域と生産域（耕作地）が発見された下田遺跡が存在していることから、毛呂台地東端部から高麗川低地帯のエリアにおいて大規模集落が継続的に営まれていたことが明らかとなりました。



調査区全景空中写真（上が北）

青線が奈良・平安時代の竪穴建物、赤線が弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴建物



5号竖穴建物（縄文時代中期中葉）（左：全景写真 右：石囲炉と埋甕）

竖穴の掘り込みは確認できなかったが、楕円形に柱穴が並び、中央部には石囲炉が設置されている。炉の付近には深鉢ふかばちが逆位で埋設されていた。



3号竖穴建物（弥生時代終末期～古墳時代初頭）（左：全景写真 右：遺物及び炭化木材）

3号竖穴建物は一辺約8mを測る大型の建物である。床面は熱を受けて赤く変色しており、多量の炭化した木材（建築部材の一部か?）が発見されたことから焼失建物とみられる。

建物の南東コーナー付近ではほぼ完形の遺物が多量に発見され、良好な一括資料となった。



2号竖穴建物（左）・6号竖穴建物（右）弥生時代終末期～古墳時代初頭頃

2号竖穴建物では、床面の一部を壇状に高した「ベッド状遺構」が検出されており、寝台、棚、祭壇などとして機能したと想定される。

6号竖穴建物は、建物中央に3本の柱穴が直線的に並んでおり、他の4本柱で支えている竖穴建物とは異なる上屋構造を持っていたとみられる。

6号竖穴建物出土遺物



3

西浦遺跡 51 区 (坂戸市大字新堀字橋場)

基本情報

調査理由：個人住宅建設

調査期間：令和2年8月24日～8月28日

調査面積：6 m²

検出遺構：溝1条（近世以降）

51 区では、東西に走行する浅い溝 1 条を検出しました。調査区西側に隣接する 41 区ではこの溝の延長部分が約 20 m にわたって発見されており、やや蛇行しながら南東方向へ伸びていることが明らかとなっています。

覆土中には、縄文土器や古代の土師器、須恵器、近世の陶器などが混入しており、最も新しい遺物の年代から、近世以降に開削された溝であることが明らかとなりました。機能については、溝の形状などから土地の境界を示す区画溝として機能していたとみられます。



調査区全景(西から撮影)

4

宮ノ前遺跡 14 区 (坂戸市片柳土地区画整理事業地内)

基本情報

調査理由：土地区画整理事業

調査期間：令和2年9月8日～9月15日

調査面積：5 m²

検出遺構：土坑1基（平安時代）

宮ノ前遺跡は坂戸市中央部の台地縁辺に位置し、遺跡の西北には崖線沿いを飯盛川が流れ、その北側には広大な沖積平野が広がっています。今回の調査で発見された楕円形の土坑からは平安時代の土師器、須恵器の小破片が数点出土しました。新しい時代の遺物の混入はみられないことから、この遺構の年代は平安時代と推定されます。宮ノ前遺跡では、平安時代の小規模な集落が発見されており、今回の調査地点は集落域のはずれにあたります。

調査区全景西から撮影
白線部分が楕円形の土坑

調査理由：宅地造成工事

調査期間：令和2年9月23日～10月25日

調査面積：263㎡

検出遺構：竪穴建物3棟（平安時代）、溝1条（平安時代・近世以降）

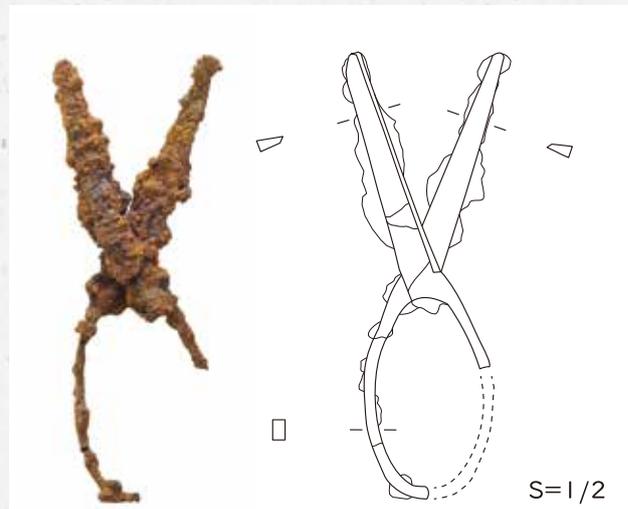
土坑3基（平安時代・近世以降）

下山田遺跡は坂戸市の中心市街地にある遺跡で、調査区付近には市役所や商業施設、住宅街が広がっています。今回の発掘調査で検出された竪穴建物3棟はいずれもほぼ同時期（9世紀後半）に建てられたものとみられ、このうち2号竪穴建物では良好な保存状態のカマドが検出されました。排煙施設であるカマドの煙道部には土師器の甕を構築材として転用しており、入れ子状に3～4個体が連結した状態で発見されました。このようなカマドの構築事例はきわめて珍しく、集落を形成した集団を考へるうえでの貴重な発見となりました。また、同建物からは鉄製の握り鋏ばさみが出土しました。

下山田遺跡の南側には奈良時代から平安時代にかけて営まれていた大規模な集落遺跡である山田遺跡が広がっています。両遺跡の位置関係からも、二つの集落は密接な関係にあったとみられ、下山田遺跡の集落は、山田遺跡の集落の外縁部において手工業生産などを担い、集落の経営基盤を支えていたのかもしれませんが。



調査区全景（周囲には住宅や商業施設が広がる）



1号竪穴建物出土鉄製握り鋏



1号竪穴建物全景写真



カマドの煙道部分には土師器の甕が転用されており、入れ子状に連結した状態で出土した。

調査原因：個人住宅建設

調査期間：令和2年10月26日～令和3年1月6日（8・9区）

令和2年12月2日～令和2年2月12日（10区）

調査面積：432㎡

検出遺構：竪穴建物17棟（縄文時代中期、古墳時代後期）溝6条、土坑4基、ピット（柱穴）群

前林遺跡は、坂戸市東部の台地上に位置する遺跡です。一帯には古墳時代の大規模な集落域が形成されており、隣接している上谷遺跡と共に数多くの竪穴建物が発見されています。近隣の調査区では粘土採掘を行ったとみられる大型土坑が発見されており、土師器の製作を生業としていた集落であるとみられます。

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴建物13棟が発見されました。このうち2号竪穴建物では、土師器坏内に赤色顔料であるベンガラ塊が残存した状態で発見されました。ベンガラは土器の彩色などに用いられるもので、比企・入間地域の土器には赤彩が積極的に採用されています。今回発見されたベンガラ塊は土器の赤彩に使用する材料とみられ、上谷遺跡と前林遺跡が土器づくりのムラであったことを裏付ける証拠の一つと言えます。



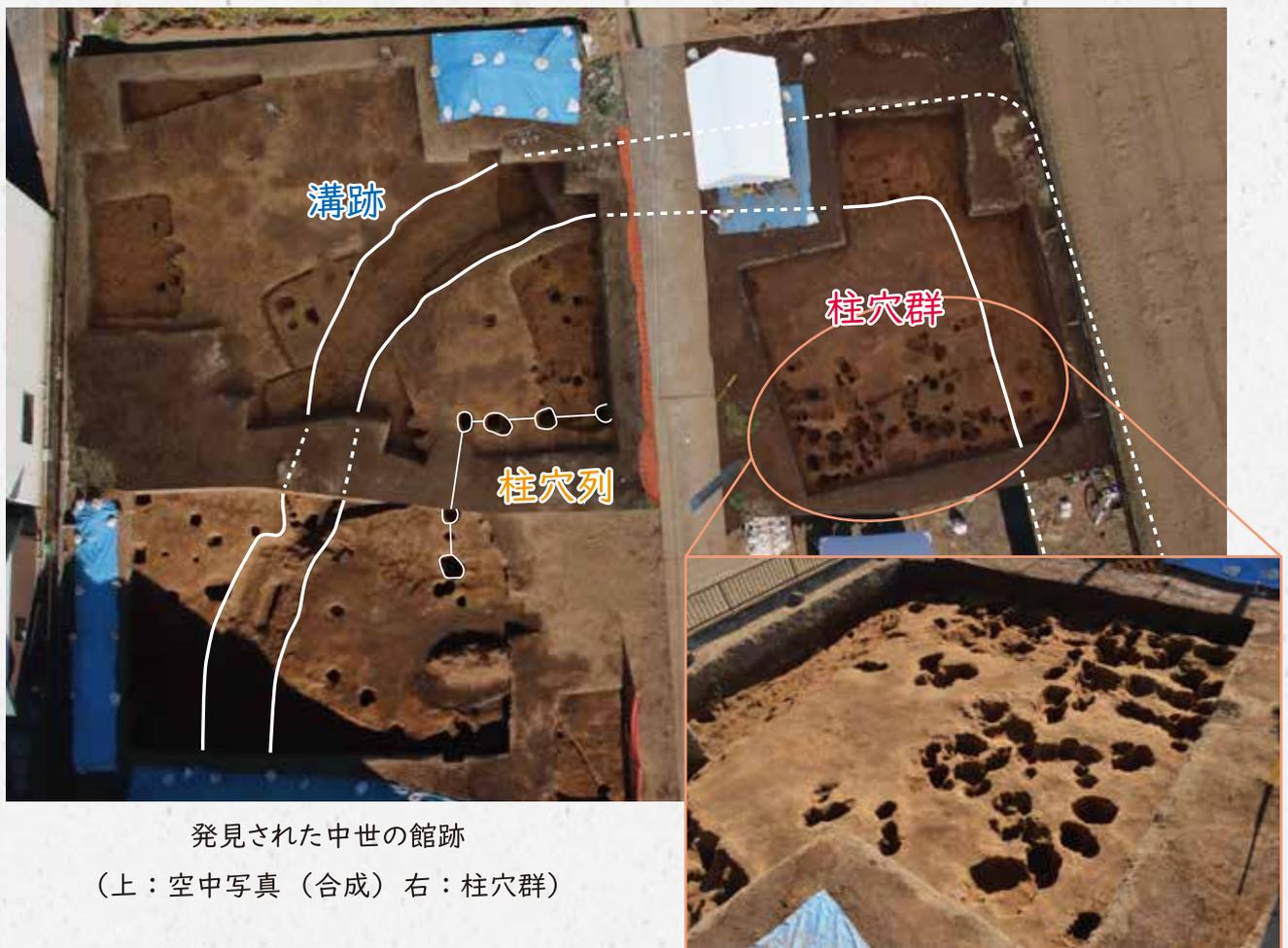
3号竪穴建物全景（左）と遺物出土状況（右）

貯蔵穴付近から土師器坏をはじめとした大量の遺物が発見された。



2号竪穴建物出土ベンガラ塊（左） 今回の調査で発見された土師器坏（右）

赤★が赤彩された土師器坏で黒★が赤彩されていない土師器坏。今回の調査区では、非赤彩の土師器坏が多く発見された。何らかの理由で着色されなかったものとみられ、製作地ならではの出土品といえる。



発見された中世の館跡
 (上：空中写真(合成) 右：柱穴群)

各調査区において発見された区画溝は「コ」の字状に巡っており、深さは約80cm、幅は最大で約250cmを測ります。区画の内側にはL字状に並んだ柱穴列や掘立柱建物を構成するとみられる多数の柱穴が検出されました。溝や柱穴からは、中世の遺物が多数出土しており、年代観はおおよそ15世紀とみられます。遺物には刀装具や茶器(右)などが含まれていることから、武士層の館跡であったとみられます。



出土した中世の遺物

ピット内から出土した縄文土器(右)

今回の調査では、縄文時代中期の竪穴建物が2棟発見されており、1棟のピット内からは、ほぼ完形の縄文土器が逆位の状態で出土しました。

出土した土器は、口縁部に等間隔の穿孔^{せんこう}が施され、穿孔^{つば}の下部には鐙^{ゆうこう}状の隆帯が一周巡っています。このような器形の土器は「有孔鐙付土器^{ゆうこうつばつきどき}」と呼ばれており、楽器や容器など用途については諸説あります。

坂戸市内での発見事例はなく、大変貴重な調査成果となりました。



遺物出土状況(上)

出土した有孔鐙付土器(右)

7 道場遺跡7区 (坂戸市大字塚越字谷治川)

基本情報

調査理由：個人住宅建設
調査期間：令和2年11月19日～12月8日
調査面積：32㎡
検出遺構：遺物包含層（縄文時代中期）

道場遺跡は坂戸市台地東部の谷治川によって開析された台地縁辺部の遺跡です。今回の調査では縄文時代中期の遺物包含層を検出しました。遺物包含層とは、土器などの遺物を含んだ土層のことで、台地上から流れ込む土砂の自然堆積や、人為的な遺物の廃棄行為等によって形成されます。包含層は調査区ほぼ全面で確認され、遺物や焼土粒子、炭化物を含む黒褐色土層が約20～30cmの厚さで堆積していました。今回の調査で遺構は検出されていませんが、包含層の存在によって当該期の集落が付近に存在していることが明らかとなりました。



遺物包含層検出状況（出土位置を記録するため、遺物を残して周囲を掘り下げている）

8 下田遺跡7区 (坂戸市西インター一丁目)

基本情報

調査理由：作業場建設
調査期間：令和3年2月22日～3月5日
調査面積：12㎡
検出遺構：流路1条（弥生時代後期～古墳時代初頭）、堤防1基（近現代）

下田遺跡は関越自動車道坂戸西スマートインター周辺の低地帯に広がる遺跡です。区画整理とその後の企業誘致に伴い、広大な面積の発掘調査を実施しています。

7区では、隣接調査区（2区-B）で確認されていた弥生時代後期から古墳時代初頭の自然流路の痕跡1条が検出されました。また、近年まで機能していた霞提



調査区全景（南から）

（不連続な堤防）の一部を確認しました。霞提は、洪水時に水田地帯へ水を誘導し河川の水量調整する役割を果たしており、この地で農業を営んだ人々の苦労や知恵を窺い知ることができます。